

## 異邦性の感覚

——立花英裕先生の人柄と研究をつなぐもの

中 村 隆 之

定年を迎えられて退職される先生に言葉を贈る相手はその人をよく知る同僚というのが一般的である。わたしの場合、本学の同僚として立花先生と一緒するのは二〇一八年度の一年間だけであり、その意味では立花先生ともっとも身近に接してきた語学教養系の同僚は立花先生を *«ami»* と呼ぶ塚原史先生だと推察されるのだが、その塚原先生もまた今年度をもって定年を迎えられるため、立花先生のお人柄とご業績を振りかえるという大役を、同僚となる以前より研究面でお世話になってきたわたしが不肖ながらも務めることになった。

立花先生のご研究については本誌掲載のご本人の「私の研究」にまとめてあるが、ごく簡単に振りかえれば、南米ウルグアイ出身のフランス語作家ロートレアモンの研究から出発し、そこからカリブ海の文学研究に領域を拡げられて現在にいたる仕事をなさっている。

わたしが先生のお仕事に初めて触れたのは、かれこれ二〇年も前のことだ。『現代思想』誌で一九九七年に「クレオール」特集が生まれ、そのなかでカリブ海マルティニック島出身のフランス語作家エドゥアール・グリッサンの翻訳と彼をめぐる論考「エドゥアール・グリッサンにおける不透明性の概念」を大学生のころに読んだのが最初だった

ように思う。当時は「クレオール」という新たな視角のもとでカリブ海発のフランス語圏の文学が精力的に日本語で紹介されていた時期であり、立花先生はその一翼をやはり旺盛に担われていた。わたしはそのあとを追ってグリッサンという作家を知り、この作家を卒業論文から博士論文まで扱うことになる（そして博士論文の審査でも立花先生にはお世話になっている）。

立花先生と面識ができたのは、わたしが東京外国語大学の博士課程に在籍していたころである。程なくしてわたしと、当時一橋大学の大学院生だった尾崎文太さん（エメ・セゼール研究）を、先生がお誘い下さったことから、グリッサンの評論 *Le Discours antillais* を読むという読書会が始まった。この読書会がいつから始まったのかが不覚にも思い出せないが、尾崎さんがマルティニック島に留学して読書会を離れることになる二〇〇三年一〇月以前から続いていたことはたしかである（その前年が始まりの年だったかどうかまでは定かではない）。ともあれ読書会には、当時東京大学の大学院生だった工藤晋さん（グリッサン研究）、大辻都さん（マリーズ・コンデ研究）、鶴戸聡さん（カテブ・ヤシン研究）たちが早くから加わり、濃密な時間を一緒に過ごしてきた。

読書会の開催場所は立花先生の研究室だった。二〇〇五年にいまの八号館の建物が完成し、現在の七階の立花先生の研究室あるいは学生指導室で研究会をおこなうようになる前は、九号館のほうでおこなっていたはずである。この読書会は息が長く、いまもなお続いている。わたしも留学のために読書会を離れる時期が三年ほどあったが、思い返せば、早稲田大学の学生でもないのに法学部の建物に十数年以上にわたって通い続けていまに至るわけだ。

読書会は、参加者が担当する章をフランス語から日本語に全訳し、これを参加者全員で検討する方針でおこなわれている。同じ本を参加者が輪読するという意味で、この読書会は「グリッサン輪読会」という名前で親しまれた。参加者であるわたしたちにとって、立花先生の主催する輪読会は、研究の研鑽を積むための重要な場所となった。立花

先生のフランス語のきわめて高度な言語運用能力とその教養に裏打ちされた深い読解から学ばなかった参加者など、一人もいないだろう。わたしはグリッサンで博論を準備していたこともあり、*Le Discours antillais*を読み込んでいた最初の五年間がとりわけ勉強になった。輪読会は、主要メンバーが留学することをきっかけにテキストを変えてきた。この機会に記しておけば、*Le Discours antillais*の次はグリッサンの*La Cohée du Lamentin*であり、その後には一九四〇年代にマルティニックで刊行されていた雑誌*Tropiques*を読み継いだのち、二〇一八年秋からはカメルーンの作家レオノーラ・ミアノの*L'Impératif transgressif*を読みすすめている。

このようにひとつの読書会が先生のご定年まで滞りなく続いてきたのは、ひとえに先生のご人徳によっている。二〇〇三年を起点に数えても一五年におよぶこの読書会のあいだ、たくさんの方が出入りをしたのだが、そのほとんどは立花先生が声がけをして参加したメンバーだった。本学でフランス語の非常勤講師を務める方々がいらっしやることもあった。そして一五年も続けば、いろいろなかたちで人々もこの読書会から巣立ち、現在では各地の大学で教鞭をとっている。

同僚や受講者のみなさんはご存知のとおり、立花先生は社交的で、当たりが柔らかい。相手の意見をつねに聞く姿勢をもち、もてなす態度で接してくださる。新しいメンバーが読書会に参加するときには必ずいま読んでいるテキストの来歴を丁寧に説明する。フランス語の読み方について意見を述べるさいにも、あくまでご自身の意見として述べるにとどまり、その解釈をめぐる議論をつうじて相手の意見にむしろ賛同されたりもする。その慎重深さと柔軟性もまた、修士の院生から大学教員まで、多様なメンバーに慕われる先生の資質なのだと思う。

立花先生の資質について、もうひとつ指摘しておきたいことがある。それは異質性、異邦性にたいする感覚だ。これは一般に、あらたに身につけた外国語でその言葉が用いられる環境に身を置く人々に共通する感覚であると思う。

見知らぬ場所に旅に出たことのある人なら誰しもが経験したことのある、他所<sup>よそも</sup>の感覚である。この感覚は旅から戻ればすぐに忘れてしまうものだが、たとえば本誌に寄稿する語学教養系の先生方のように、外国語を教えることを職業とする場合、異邦性の感覚はどこにいても持続するのではないだろうか。

立花先生の場合、この感覚がひととき鋭いのではないかと思う。周囲ではよく知られるように、立花先生はフランス語のほかにスペイン語を用いる。先生にとってのスペイン語は、パートナーやその家族・親族と話すときの生活の言語である。スペイン語は、机上の学習からではなく、耳から覚えた、自分にとって口承世界の言語なのだ、とうかがった。また、みずからの感情を表現するときには、日本語よりもむしろ外国語のほうがストレートに表しやすい、ともうかがった。

実際、こんなエピソードがある。マルティニック島で一緒にいたさいのことだ。その日、わたしの年長の友人宅でパーティーがあり、立花先生も招かれていた。立花先生の宿泊先（民家）まで、友人の弟が車で迎えに行くことになり、わたしも同乗した。しかし、不幸なことに、教えてもらった宿泊先が見つからず、おまけに電話も通じない。友人の弟のストレスはたまる一方だ。一時間はかかったと思うのだが、ようやく先生と合流することができ、車で友人宅に向かう道中、友人の弟の粗っぽい口ぶりから口論となり、ゆうに三〇分は車中で激しい言い合いとなった。とにかくそのときの先生のフランス語でのまくし立て方がすさまじく、同席していたわたしには口を挟む余地すらなく、ただただ舌を巻いて呆気にとられたことがある。

もうひとつ、これは気づいている方もおられると思うが、立花先生は、話のなかでいったん間を置くときに、独特の声色になる。日本語では「あー」「えー」といった間をとる間投詞が外国語のように聞こえるのである。この理由について、昨年度、立花先生の授業「地域文化ⅠD」を受講した学生から尋ねられたことがある。とっさに出てきた

わたしの答えは、立花先生は、多言語のはざままで思考をしているから、フランス語やスペイン語で話すときの間のとりかたが習慣化したのだと思う、というものだった。

これらは、外国語での生活の長さを感じさせる、断片的な挿話にすぎない。しかしこうして外国語をみずからの生の根幹に据えているからこそ、異邦性の感覚も、非常に鋭くなるのではないだろうか。また、そうであるからこそ、他者にたいして優しく寛容であられるのではないだろうか。そして、そうした資質と周囲からの深い信頼があるからこそ、日本フランス語教育学会会長、日本ケベック学会会長といった要職を歴任されてきているのだと思う。

研究面においては、先ほどの輪読会での活動の一方、いくつかの編著と数多くの翻訳を出されている。詳細はご業績一覧に回し、わたしの視点からその代表作をあげると、『21世紀の知識人』（共編）、ブルデュー『国家貴族』、ヴィノック『知識人の時代』（共訳）、ラフェリエール『ハイチ震災日記』、フランケティエンヌほか『月光浴』（共編・共訳）、セゼール『ニグロとして生きる』（共訳）、ドゥペストル『ハイチ女へのハレルヤ』（共訳）がすぐに思い浮かぶ。このリストは今後増えていくにちがいない。というのも、立花先生のお仕事は現在進行形であるからだ。現在のご関心の中心にはエメ・セゼールがおり、セゼールを結節点にカリブ海とアフリカの文化世界までが射程に収められている。

フランス語圏、とくにカリブ海文学に大きなご関心を寄せることと、鋭い異邦性の感覚は相関関係にある。なぜなら他所者の感覚とは、少数者の感覚だからだ。植民地に生まれてフランス語を外国語のように身につけたエメ・セゼールの世代の書き手たちがカリブ海やアフリカの新しい文学表現を担った。彼らもフランス語世界のなかで強烈な異邦性の感覚を抱いていたにちがいない。スペイン語の地で生まれたフランス人ロートレアモンからエメ・セゼールまで、立花先生のご関心は一貫している。

これまでは学内外での活発なお仕事で時間も限られていたが、二〇一九年度からはその多くの時間をご研究に傾注されるはずである。語学教養系の教員を代表し、心からの感謝の気持ちを込めて、立花先生の今後のますますのご活躍を祈念して本稿を閉じたい。